

聖女は死んだッ！ もう
いない！！！！

おーり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グレン●ガンかな？

なんやかんやがありました、異世界には、勝てなかったよ…

というお話（GATE側からの私見）

どちらかというと盛大な玉突き事故

目次

斯くして 世界は繋がった	—	1
彼の聖女が 死んだ理由(ワケ)	16	
クロスオーバーの その先	—	31

斯くして 世界は繋がった

チリ……ツ、と空気の張り詰める感覚を其処に識った。

剣気とも読むが、理の読み合いを獲る武人らが、心理で以て検算する間合いと隙の詰め合いを常識では「殺気」と読む。

裏の探り合い、脚の向き、体幹の傾斜、足元の有無、e t c.

諸々様々に氾濫するその場の情動を総濼いして、時に対壺、時に無人、時に複数逆も然り、と『勝てる』筋道を探るのが彼らの心理である。

其れが骨子にて始原であるかのように、彼らは其処を探ることを止めやしない。

武骨な男だった。

眼差しは熊か鷹のように凶暴だが、恰好は倚れた着物をただ『纏っている』だけの着た切りで伸ばした頭髮は無造作に鬚を結うかのように纏めてある。

一見では世に廃れ草臥れた老人のように、その姿に覇気を感じないことなどは無いだろう。

しかし壮年を経て尚、斬ることを辞めなかった彼は、立ち振る舞いひとつ問うても劍士侍の域を発していた。

【侍】とは元來『候う』^{こゝら}という言葉の通りに仕える者を指す言葉だが、彼に至っては『時代劇の浪人』というイメージそのままの連想が似合っている。

先行したイメージがそのまま形を撮ったような、そんな男が剣を構えて、少年の様な『彼』と対峙していた。

肌が焼けるようにひりつく感覚は、まるで何時間もそうした獄中に晒されているかのような緊張と倦怠の奔流に思考を揺蕩わせる。

実際は未だ数舜も時も稼いでおらず、相手にその気も無いので単なる錯覚だ。

勝負は一瞬。

長くずるずると決め手が付かないことなど【格】に誇りを抱く者からすれば単なる恥であり、己の未熟を晒すことに他ならない。

故に互いに武人足り得るのだと、熨斗柄のしのえ 燦さんは相手の男をジツと見詰めた。

「——往きます」

「何時でも」

短い遣り取り。

お互いに『構え』からジツと動かなかった両者が口を開き、次の瞬間には一歩、

——燦の躰がが男の眼前に踏み込んでいた。

世界が今の形になって、実のところそれほど経っていないという事実を、伊丹耀司は書類に付随されていた小さい数字に思い知った。

思い知り、また今年も休暇即売会は無しか……！ と懊悩したのは成長か、否か。

己の趣味こそを第一主義として掲げていた筈の青いい歳したオッサン年は、陸上自衛隊所属で在りながらも、異世界の貴族という立場に収まっておきながらも、尚且つ信条を曲げようとならない様子。

其処はいつそ骨が在るとでも認識すれば良いのだろうか。

そもそもこの始まりは、日本を中心に世界にて知られる『銀座事件』という異世界との第一接触を発端としている。

ある神の御業を利用した『ある世界』の侵略国家が銀座の一角に【門】を開き、剣とデミヒューマンとドラゴン（弱）の群れと武力蜂起で以て制圧に取り掛かろうとしたことが始まりである。

戦う力の無い一般市民にとってはテロリスト同然の武力侵攻なんぞ堪った物でも無いのだが、実働部隊が出張ってくれば当然の如く返り討ちに遭った。

伊丹耀司は、そんな実働部隊の動く『前』に市民を救助することに尽力した。

世に謂う「二ツ橋の英雄」である。

それからなんやかんやがあつて、相手側の世界へ逆侵攻したり、ドラゴン（狂）を退治するに至つたり、世界を繋げた主犯と対峙することになったり、侵略国家のクーデターを鎮圧する破目になったり、【門】を閉じるべく奔走したり、と。

色々動き回つて、なんとか事を鎮められるかと安堵したところで、そうは問屋が卸さなかつた。

書類から顔を上げて、廊下の窓から伺える青い空へと自然と目を向ける。

そうして見上げた空の果てに、延々と続く大地を見た。

頬が引き攣るような乾いた笑みを思わず浮かべるが、この光景が未だ年内で仕上がつたという事実からこそ、伊丹は頭痛を覚えるのである。幻痛だが。

自転公転どうなつてんだらうとか、何処の世界からも伺える辺り物理法則無視してんな、とか。

異世界の果てに暗黒物質調査に同行した養鳴教授辺りは憤慨しているか歓喜しているか。

どちらにせよ碌な精神状態ではないであろうから考えないこととする。

見えている『上空』の大地は、見たままに『異世界』の代物だ。

とはいっても、元々繋がっていた『門の先』にある異世界ではない。

飛行すればある地点で重力が反転し、『上』の物理法則に従って行き来が可能だが、だからこそ人類は宇宙から鎖された状態に押し留められているとも云える。

『門の先』で閉門に成功した伊丹であったが、彼の帰還も再び開けられた門を通じて、だ。

閉門的一幕には一連の騒動の主犯足る異世界の神、冥府に紐付けられし筈のハーディなる主神が惑星連結封鎖の一因に巻き込まれて受肉し、さめざめと伊丹相手に愚痴を零しそれを *prgr* と嘲笑うゴスロリの亜神なんかも居た騒動があったのだが割愛する。

最終的に伊丹が言いたいことはひとつだ、じゃああの伺える異世界は何処の何なのよ、と。

傍目に見えている『それ』だけが、全ての騒動の原因でも無い。

海の底にはまた別の異世界が見えており、海底一万に達するまでも無く渡海ならぬ境界を果たせたとの報告があった。

それだけではなく、使われなくなった枯れ井戸の底、霧の果て、山の奥、トンネルの先、夜の果て、鏡の向こう、図書館の本棚の隙間、開かなかった筈の扉の先、適当に上下させたエレベーターの出口、古い机の引き出しの中、果てには電子の海なんていう人

間には足の踏み場もない場所にまで e t c.

ありとあらゆる境界の果てに、人類は新たな世界を見出したのである。

だが当然ながら、それらは文字通りの『新天地』とはいかなかった。

むしろ、だからこそ問題が増えた、とも云える。

乱雑に異世界との境界線が氾濫した結果、あちら側からもこちら側からも漂流者や漂流物がキリも無くお互いを浸食し合い、かつての【門】を鎖すかどうかなどという次元の問題は立ち消えてしまったほどのだから。

「いやあ、参った。一手目は読めたが、それを捌かれる覚悟のうえで『肉を切らせて骨を切る』を実践する猛者がこの歳になって現れるとはなあ。こんなんじやアトミック流は名乗れもしない」

「そんな名前だったんですか、あの居合剣術……」

自省するようなちよんまげと、それを呆れる様子で見上げながら連れ立つ年齢層ちぐはぐな二人組が視界に入る。

胡乱な目を向ける少年の感想に、伊丹も同じように胡乱な感想を抱いた。

そんな名前だったのか、跡見さんのぎつくばらんムチャクチャ剣術……。

跡見というあの男は、この年内に各地を放浪して異世界からの流れモノ相手に無双と

対処を繰り返してきた猛者でもある。

元々は銀座に【門】が現れる以前、異世界から流れ着いた怪物を相手に武道家仲間の三波 鋼鉄と共に大激闘を繰り広げ大怪我を負い、偶然居合わせた西比田 金屋子なる人物にサイボーグ手術を受けて再生したのが彼ら【鋼鉄武人】^{マグネボグ}だ。

【門】という分かり易い区分のあつた銀座事件とは違い、世界各地で異世界との融合にも似た連結が繰り返されれば、其処には当然被害も出る。

出会つた者すべてが帰ることが無かつた、という無分別ばかりでは流石に無かつたが、其れなりに出た被害者の欠損なんかを援けて来たのが彼らと、西比田何某の齎した機械融合技術^{サイバネテイクス}。

幸か不幸か、異世界との衝突にて技術文化だけは矢鱈と向上し、現在の医療技術はこの1年で相当の上昇傾向に当たるとも云われている。

伊丹が探していたのはそんな二人の片割れの方だ。

数時間前に時雨と戦つた飛影みたいに片腕と腹を斬られた少年の方。

跡見は跡見で件の時雨みたいに人中から脳幹までを輪切りにされたらしいのだが、そんな瀕死も数時間で蘇生させるのだから医療技術の天元突破振りは良く判ることだろう。

というか仮にも臨終一步手前まで逝くような斬り合いをしていたのだから、もう少し

安静にして居ると言いたい。

あの様子だと『二戦目』を繰り広げそうでもある。

「おふたりさん、用事があるんだがお話良いかあ？」

「おお、伊丹か」

「伊丹さんっ」

少年、熨斗柄 燦から向けられる視線は微妙に熱い。

何処かキラキラとしたモノを感じるの、少年らしい何かへの憧憬とも理解は出来るが、それを向けられる原因が伊丹自身の内に無い為に何時も顔合わせ時は困惑が伴われる。

んー？ と眩いモノに目を眇めつつ苦笑を滲ませる伊丹とは対照的に、燦の眼差しは少年とおっさんを掛け算で顕わとしようとする婦女子らが『ほほう……、続けて？』と大歓喜するレベルの熱量である。

腐海へ帰れ（冷酷）

「熨斗柄、お前さんこの間の起動実験、もういつかい頼みたいんだが良いかねえ？」

「……えー」

一転して、非常に不本意な顔で少年は眼差しが翳る。

あご髭を撫でつつ、跡見が換わって応えていた。

「起動実験つてのは、この時期だとアレか？ 例の『変態』」

「跡見さん、その略称はどうかと思うんだけどな」

「女にしか扱えん時点で変態性能だろうが。例のドラゴンとか、艦隊とか、航空機とか」
 「神とか悪魔とか英雄とかもありですけどねえ」

「なんで戦う役割を女子供に押し付けてんだらうな」

その辺りは日本人文化特有の性SAGAとしか言いようもない。

カルマ業、とも言い換えられ得るが。

鋼鉄武人もそうだが、異世界との共浸食で最も必要とされたのが『自衛力』であった。誰もが戦えるわけではないのは明白で、だからこそ日本政府は各地で研究されていた『常在戦場』を是とするほどの戦闘力の擁立を黙認せざるう得なかった。

そんな中で台頭してきたのが、真っ先に表立って交流していたある異世界文化に於けて有力視されていた【魔法】だったのである。

つまり、伊丹とある種の交流関係を測って居る魔導学術研究者レレイラ レレーナが最大の立役者であつたりもする。

その点では伊丹は、遠因在りながらも最大の功労者でもあるので、決して悪意以て取り憚られることも無いのである。

話を戻すが、有力視されていた魔法だが、『そのまま』を利用できるほどこちらの理解

が深いわけでは当然無かった。

取り沙汰されたのは文化と技術のミックスであり、前段階にて社会認識に根付いていた概念などを有効的に利用しようとした結果、一種の文化トリアージや心理的サルベージに引き繋がれた、というのが真相でもある。

そうして生まれたのが、神話や歴史に埋没した強大な存在等の魂や概念を汲み上げて女子供へと憑依同化させるといふ『悪の秘密結社』みたいな人体改造である。

一部では合成人間とか改造人間とか呼ばれたりもするが、名称が違えど本質は同じである。

なんで女子供に兼ね合わせるのかと問われれば、認識に多大な影響を与える精神的な存在だから精神性が臆げなうちが憑依させやすいとか、違う理論を同時に働かせるデュアルタスクが必須なので女子の方が適合するだとか、まあ色々と理屈は並べ立てられるが本音のところは知った話でもない。趣味だと云えば済むのではなからうか。

話を戻す。

「今の時期に出て来た話つつたら、アレだろ？ 男性の適合者が出たとか云うんで、改めて全国で一斉に調査し直してやつ」

「そつすね。此れまでみたい直に直に人間に混ぜるタイプじゃなくて、武装型の」

【銀座事件】が起こるよりずっと以前からそれは『趣味』の、飽く迄娯楽としての範囲

で静かに版図を広げていた。

戦術や物流に組み込まれようという思惑があったとも噂されたが、根本的に絶対数が足りなく、それを扱える人材も限られる以上は偶像アイドル以上の役割を維持できない。

その名称は「インフィニット・ストラトス」。

とある天才を自称する科学者が発明した、女性にしか扱えない武装型飛行戦闘ユニットである。

「……なんでこつち陸自に話が来てんだ？」

「【氾濫】からこつち、『世界』が狭くなったでしょう？ 絶対数足りなくつても、交流には扱えるんじゃないか、つてのがお偉方の判断みたいで」

上を指さしながら、伊丹は云う。

上司のことかとも思ったが、もつと単純に『天の果て』を指しているのだと理解した。飛ばば辿り着ける、最も近くて確実に繋がった異世界。

日本政府は現状、確実な交流先を求めているのである。

「で、だ。話が長くなつた気もするが、熨斗柄。お前さん、アレ、扱えるだろ」

「……なんのことでしょう。俺は見ての通り男子ですけど？」

目を逸らしながら、燦は云う。

実のところ、燦の見た目は紅顔の美少年と頭わしても過言では無いくらい整ってい

る。

中性的に、女装が似合う通り越して美少女造れるぜと豪語できるレベルで幼く可愛らしいので、ぶっちゃけおっさんと剣戟繰り広げる方が違和感が凄いのである。

それはそれで返り血と集中の形相が相俟って美麗な趣味ニッチに突き刺さりそうではあるが。

「お前さんの魔ジンキだっけか、アレの影響性能研究した学者先生からの指摘だったんだけどな。……アレ、ISの完全上位互換だって云う話だけど？」

伊丹命名学者先生が曰くところ、それどころか現行の憑依合成改造新人類の上を完全に凌駕する、とのお墨付きだ。

最強系チートキャラだよ、やったね燦ちゃん！

「……………」

しかし燦は伊丹から顔を背けたまま、決して肯定しようとしなかった。

彼は理解しているのだ。

そのまま『動かせる』事実を打ち明けてしまうと、政府主導で取り沙汰されている学園施設に強制的に編入を要求されるという事実を。

突っ撥ねることも可能かもしれないが、そうすると今度は自分の要求をこそ押し通せなくなってしまう。

燦自身、未だ高等学校に通つても可笑しくない年齢であるので、学業施設へ放り込まれることは日本社会に於いては中々に拒否も押し通し難い。

しかし其処に関わつていては、恐らくは泥沼か蟻地獄に足を取られるかのような閉塞が彼を身動き取れなくさせるだろう。

結局のところは、彼自身の中に『ある目的』を達成できなくなつてしまう懸念こそが、彼が是と頷かない最大の理由なのである。

「なあ、頼むよ熨斗柄、俺もあんまり言いたくないけどさあ、せめて仲間は欲しいんだつてえ」

「……？ 仲間？」

が、此処で変な理屈を耳にした。

なんで其処で伊丹が沈痛な声を上げるのか。

「なんだあ？ 伊丹、お前IS動かしたのか？ 今更高校生やり直すのか？」

「違うつすよお！ 警備勤務！ 異世界留学生のレレイもですけど、他の合成改造新人類も件の学校が表立つて集めてますからねえ、まかり間違つて襲撃されたら事だつてんで、陸自からも人員割くことになつたんすよお」

「で、お前さんに白羽の矢が立つた、つてわけか」

「しかも何の因果かピニヤ殿下まで通うんすよ……、異世界帰れよお……」

『あちらの世界』出身であるピニャ コ ラーダという姫殿下は侵略国家の王位継承権第3位であったのだが、何故か現在最有力の次王として件の世界では名を馳せている。

そしてそんな彼女との交流が伊丹は心底苦手なのである。

「……異世界探索の作戦指揮を執るんじやなかったんですか……？」

各地に拓いた境界線を探る、要は最前線だ。

燦の驚き交じりの声音に、しかし伊丹の返事は泣き言のようでもあった。

「そんなのは別に廻してあるよ。俺は、楽が、したいの！ この1年働き詰めだったんだから、休暇も貰えねえんならもつと気楽な任務が良いに決まってんだろお！」

「ああ、聞く話じゃ件の学園、女子校らしいしなあ。おっさんにはキツイな」

突然だが、話の要所に出てくるISは待機状態という形状へコンパクトに纏めることが出来る。

粒子状にコンパクトが可能『武装』であり『兵器』であるのだが、幾ら良い性能を発揮しようともシステムの根幹を作成できるのが件の製作者唯一であったり、その絶対数の少なさで全世界70億の人類を凌駕できるかと問われれば当然無理だと話が済む。

だからこそ、戦う力であり兵器であったとしても、『軍』には匹敵し得ないとして見逃され、多少危なっかしい玩具として『趣味』の範囲で文化の賛同者が居たに過ぎなかつ

た。

それを討ち崩したのが異世界からの侵略と浸食で在り、新たな開拓への希望として見直そうという視点も付随されてきた。

その結果が、伊丹が持ってきた『試験』の話である。

そう、この場に待機状態の汎用型をひとつ。

伊丹は持つてきていたわけである。

「それで、学園警備勤務でしたっけ。大丈夫ですね、女装にも自信はあります！」
「いや、お前さんは普通に通ってくれても問題無いのよ？」

泣き言漏らした伊丹の手から何の気なしに拾い上げ、汎用型ISを完全に制御した状態
態で身に纏った熨斗柄 燦は自信満々に言い切った。

彼の聖女が 死んだ理由（ワケ）

「わあ、此処がわたしたちが今日から通う学園なんです。なんだかわくわくしますねっ」

趣味と娯楽を主軸とし女性らが兵器を駆らせることが学修主題になって居る学園へ、年相応ながらも放り込まれることが確定した時点で燦の機嫌は最悪の一言で済ませられる程には荒んでいる。

なので、青髪の少女が胸を弾ませて喜色の声を挙げたことに関して、非常に嫌そうな貌を晒していた。

「あの、せめて舌打ちはやめてくれますか……？」

生まれが良い身分なのだろうか、少年の態度が極悪な点をしかし彼女はやんわりと宥めるに留めていた。

傍から見ても些か碌な関係には伺えない二人組だ。

しかし幾ら彼女の育ちが良いからと言って、その程度で済ませられている辺り相性が悪いと云う事は無いのだろう。

二人を歓迎したI S学園教諭の山田真耶は若干怯えながらも、様子を伺い心理を推考^{妄想}

することが留められない。

女子高時代に培った耳年増おぼこの推移そのままに成長した（出来てない）彼女は、取り止められない思考から相貌の色を揺らがせて引率するのみに留めて置けなかった。

質の悪いダンシングフラワーの様に身悶え腰をくねらせる姿に、機嫌の悪かった燦ですらドン引きした程だ。

「あ、あのー、ヤマダ先生？ それで、私たちはこれから何処へ？」

青髪の少女に恐る恐ると声を掛けられて、はつと現実へ還って来れた真耶はオウフと晒った。

普通にキモい。

「え、ええ、貴方たちは政府の肝煎りとはいえ、編入生として扱うことになっていきますからね。先ずはその実力を測らせて欲しいというのがこちらからのお願いです」

「普通に編入試験ではダメなんですかね」

燦は今までの奇行に関しては触れないことにした、否『したい』らしい。

見目の可憐な紅顔の美少年に声を掛けられてご飯3杯の妄想が捗りそうだった真耶であったが、ぐつと堪えて笑顔を向けた。手遅れである。

「貴方に関しては公式的な『2人目』になりますからね。自衛も含めて、どの程度まで戦えるかを測ることは絶対条件になっているんです」

真耶のその意見はISの兵器的な優位性を疑っていない認識に基づいていた。

実際、高速空中機動を取り扱う為に装備者の安全を維持するためのシステムに始まり、現行兵器をスペックだけならば凌駕する仕様となって居るISは確かに『最強』とも呼べるのだろう。

しかし其処を覆せる『穴』など幾らでもあるので、その視点と認識は些か独善的に過ぎない。

その点は指摘せずに、燦は質問を重ねた。

「自衛隊も警備に当たるとの話なんです、個人戦力を測ることは本当に必要なんですか？」

暗に、警備を信用していないのか、とも訊いている。

更には、学園内の治安についても含まれている。

ナニハトモアレ学業施設なのに、何故戦闘力必須な話になって居るのかコレガトントワカラナイ。

「うーん、疑うわけでは無いんですけど、ISと比べちゃうと絶対安全とは言い難いですよねえ」

恐らくは燦の尋ねたいことの意図も吟味せずに、真耶は微笑み乍ら答えていた。

青い髪の少女が蒼い顔になっていた。

燦が何処に所属し、彼女もまたそれを知っているからこそ真耶の発言にドン引きしているようであった。

直径50キロ弱のクレーターが東京湾に生じ、その湾内に伺える海底世界が日本から伺える『また別』の異世界だ。

はつきりと見えていながらも、未だに交流を図れない代表的な異世界事例その2。

燦並びに青髪の少女がこれより通うI S学園は、そんな湾内に人工的に形成された海遊都市だ。

元々はI S産業という名のアイドル活動であぶく銭を濡れ手に粟のように稼ぐことに成功した篤志家が、その娯楽を後押しするための『学園』を形成しようとしたことが始まりであった。

空を自在に飛び回り、既存のスポーツやレースを凌駕するスピードで勝敗と優劣を競う。

その中心競技者が年若い少女ばかりだとすれば、後援を望む者からすれば当然見目良い方が票を稼げることに直ぐ思い至つただろう。

実際初期のI S学園では受験項目に『オーデション』が在り、その様は宛らコンテストのように熱気と羨望に溢れていたという。

そうして寄り『稼げる』ことを測れた『主催側』は、其処へ通う子女らへの優先度を

上げに上げた。

最先端の情報と物資が即座に流れてくる位置を、更には都市形成の技術が何処よりも上である事の自負を。

そうして企画されたのが、東京からモノレールでの海上遊覧移動も見目に愉しい『全く新しい』新築都市であった。

ちなみに『それ』より先にその場所に形成すべく企画されていた都市にあつた学園の名称は『月光館』などと云つた筈である。余談だが。

しかしまあ先にも述べた通り、東京湾は異様な地殻変動と同等の変貌が急襲し、海上へ造るには何かと地盤的に不可能であるとの見解が述べられた。

それを覆したのがI Sの製作者であつたり、世に紛れ始めていた異世界の技術の応用であつたりとするのだが、当然それらを全面的に信用するには色々と『足りなかつた』。

そもそも『目に見える』異世界との境界線、其処に浮かぶ新造都市だ。

幾ら渡界に成功したとの報告があつたとはいえ、何らかの拍子で侵攻される可能性が無いとも言い切れない。

まあそれを見込まれて元来のI S搭乗者だけではなく、あらゆるジャンルの『少女たち』を集める方式に意見が纏まつて『いる』、否『纏まつてしまった』わけであるのだが。

彼女ら全員が全員、それぞれに目的も主張もあるのだから『足並みを揃えましょう仲

良く』とは絶対的に熟せやしない。

だからこそ、IS学園は『絶対安全』とは言い難かったりもしていた。獅子でも無しに、身中に蟲を飼った結果だろうとは燦の愚見だ。

「そちらのえーと、シシリー クロードさんでしたっけ。貴方は漂流者ということでもそも女の子ですし、保護に異論は挟まれないそうです。なので、今日は見学で結構ですよ？」

続いた真耶の言葉に、燦だけではなく青髪の方も察した。

要するに、女子校だから男子が紛れることには初めから納得できていない、というだけなのだろう。

それが真耶本人の意見か、はたまた学園に蔓延する『女子』らの意思かは判別がつかないし興味も無いが、燦としては己の所属する日本の自衛を司る立派な職業軍人を馬鹿にされてややご立腹である。

袋叩きにする。

無言実行、対峙した学園最強などと自負していた少女は『あらゆる手』を遣り切った上で土を舐めることと相なった。



「(ひよとして、シンくんは此処を知っていた、ううん、此処で育っていたのかも知れないですね……)」

『漢字』という文字を知った。

誰かさんがオリジナルだと言っていた魔法文字だった。

『異世界』を知った。

そもそも自分がそちらから流れ着いた。

『異世界転生』という創作を知った。

そもそも『異世界』という概念も創作の産物のはずだった、ということも聴いたので、これもあるのではと思に至った。

ヒトの想像は何時か実現し得る未来という可能性だ、という言葉は『こちら』で知ったが、『事例』を幾つか実感していた彼女にとってはストンと胸に落ちた納得の言葉でもあった。

シシリー クロード C ウォルフオードは「漂流者」だ。

『魔法』が技術の主軸となっていている世界からの、事故によって流れ着いてしまった17の少女だ。

一応結婚もしているのだが、比較的紳士的に保護を受けていた彼女は新婚でありながらも未だ学生の身であったこともあってその事実までは明かさなかった。

故に、この世界での彼女は旧姓のクロードまでしか名乗っていない。

学生結婚という行為に何かしらの忌避を抱いていた、妙に現代日本的な感性が無意識で隠蔽を促したのかもしれない。文化意識レベルがお察しな世界だった筈な上に、16で成人扱いの国柄だった筈なのだが。

彼女がこの世界に流れ着いてしまった事故は、とある人類の敵「魔人」との最終対決にて起こった顛末に由来する。

件の結婚相手と相手魔人の王が直接対決を執った際、相手自身を庇った女性の魔人諸共に攻撃魔法を放ったことに怒った旦那様が感情のままに放った攻撃魔法。それが暴発し、次に穴を空けたのだと思われる。

シシリーと瀕死の魔人の女性、そして魔人の王オリーブ シュトロームは揃って異世界へと漂流し、運良く剣の鍛錬中であつた陸自所属の少年 燦の眼前に空間を割いて現れたのであつた。

「収束光線？」と話を聴いた伊丹が名付けたそれは、相手の防御を貫くために旦那様が魔力を貯め込んで攻撃へ転化する、味方の乱戦の隙を突いて斃す『英雄的行為』の予定であつた。

誰しも損害は出したくないし、強大な敵が独りであつたとはいえ複数で当たることは戦術的には正しいし、命と未来守るためには卑怯だのと言われても押し通して惜しくな

い。天秤に尊厳を吊つても適正価格で吊り合うだろう。安全マージンは大事だと、誰もが彼らの行為を咎めることはしなかった。

ただ、主要メンバーが軍属を脇へ押し退けた『学生の身であったこと』までは説明されていいないし、服装が衝撃波の余波で襤褸切れを纏っただけの様な恰好になっていたシリーズが『元の世界の仲間との制服』を再現できないために所属もよく名乗れておらず（名乗るも恥ずかしい名称であることを自覚しているし、名乗られたところで異世界の何だと謂う話なので正直困る）、彼女自身もまた自分のことを『二つ名』で説明することも憚られ、実のところ何某かの武装集団に属しているとも自覚もしていなかったので突き詰められると説明に困られたことも事実であつたし、と。

『何故こんな真似をしたんです。私は貴女を大事になんてしなかったというのに』『貴方の苦しみは、私たちががしつています…、貴方だけが独りであることは、ないんです…』『ミリアさん…』『とりあえず医務室往く？』

結局、付き物が落ちたかのように大人しくなっていたオリバーとミリアは一緒に転移して来た赤子と纏めて家族と云う事で自衛隊に保護されたし、シリーズもまた色々と感じ極まっていた男女の遣り取りに悪意を向けるような少女でもない。

むしろ彼らの遣り取り（自衛隊の科白を除く）に魔人同士でしか理解し得ない葛藤があつたのだろうと察したシリーズは、聖女と呼ばれた精神性のままに何某かの悲劇が一

つの救いに繋がったのだと理解するに留められたわけである。

事故は事故として、今度はそれをどうにかしようか、と話は切り替えられた。

次元に穴を空けた原理を詳しく訊かれても、旦那様の超理論（天元突破 *Ver*）でシリールは理解できてないから説明が難しい。

居合わせて話を聴いた他の研究者が『他の魔法』について尋ねた際には『どういう理屈でそれらが罷り通るのか一切理解できない』と白い目を向けられた。悲しい話だ。

実のところ中途半端に科学を引用した『なんちやって理論』を無理矢理に押し通した理屈ばかりであったので『空間ゲート？ 平面を曲げて繋げるイメージ？ いや、空間は3次元だしそうするだけのエネルギーは何処から…？』という至極真つ当な小喃ツツコミから始まって、そもそも異世界との境界を繋げた例えばハーデイ何某ツツコミくらいの『なんらか』が必要な『技術』なんじゃないか？ とかなり懐疑の目を向けられて。

実際に使ってみよう、とすればどっこい魔法を一切扱えなくなっていた事実に気が付いた。

そもそも魔力を感じられない！ とパニックにも陥るシリール嬢を宥めつつ、事故による一時的な無意識性嫌厭症？ と心理分析を促す女性自衛官も居たりしたが、あまり帰る気が無くなっていたオリバーが口を挟んだ。

世界が違えば理屈も違うのではないかと。

尚、次元を移動した程度で揺らぐ辺り随分と脆弱な根幹ですnee、と煽られた事實は不問にする。言い返せなかつたし、煽つた方も煽つた方でなんだかつまらなそうだったので元より相性が合わないのだろう。とうか煽つた方もまた魔法を扱えていた感が薄いのだが……。

そんなわけで話は付いたのだが（ついたかなあ）。

が、そうなるとしシリ嬢が独力で帰還することは困難であるし、そもそもがそんなハチャメチャ理屈が罷り通る世界だとすれば次元の位相が違い過ぎる、というのが専門家の私見。

三次元が二次元に逝けない理屈か、と納得したのは伊丹を始めとする複数人の同士らであつた。

まあ、だとすると二次元が其処に実在していることにはどうなんだ、とツツコまれるかも知だが、なつてしまつてゐるものは仕方ないとしか言いようもない。

どちらかと云えば異世界と繋がりがまくつてキャパがガバガバになつた世界だから『実現』だけは寛容な可能性もあるのだが。何処にでも節操無く股開けやがつて世界め！

閑話休題。

さて、なんやかんやがあつて。

帰れない事実を突き付けられたシリィであつたが、折角なので奨められた彼女か

らしたら『異世界の』学術を改めて学び直す機会を請けることになった。

『折角なので』と云ったのは日本側だ、彼女ではない。

心理解析が実のところかなり進んでいる文化社会なので、『被害者』の自発的な行動を待つとマイナス方面へ傾きやすいことは把握されているのだ。特に、彼女みたいなあまり前へ出て来ないようなタイプの少女ならば、と傍から見ただけで女性自衛官が促した。

結果、伊丹始めとする同好の士らが寄贈していた『比較的安全』で『理解の容易い』書籍群で、彼女のパラダイムはヤックデカルチャーを迎えた。ようこそ沼へ。

横山三国志は偉大である。

さて話を戻そう。

色んな方面から物事を見直した結果、自身の旦那はなるほど「チート」と類される異世界転生を果たしたのだろう、とすくと納得した。

実のところは彼が赤子の頃に遭遇したスワンプマン現象、憑依転生というモノに類する体験らしいのだが、まあ細かい話は本人が明かそうとしなかった秘密（というより後ろめたい事情に類する心持ちかと思われる）だし、シシリーには其処まで推考する情報が無い為に割とどうでもいい類分析だ。

大事なのは本人が『家族』にも明かそうとしなかった以上は、『信頼』を正しく得られ

ていなかったのか、とシシリー自身が愕然とした『事実』の方だ。

飽くまで『真実』かとは思ってはいない。

誰も心中まで明け透けではないし、ひよつとすれば何も考えていなかったのかもしれない。

ただ行動の結果だけが現状に遺っている。

そもそもが、反省している後悔していると、割と言葉にしていたにも関わらず『常識』を正しく学ぼうとして来なかったのが件の彼だ。

現代日本の文化社会を知ってしまったえば『故郷』の世界はとんだ未発達な文明に見えただろうから、そんな『猿』を相手に真実とやらを明かそうという心理に慣れなかったのかも知れない。

尤も、そう意図したと仮定しても、彼が披露した『科学知識』がこちらで『学び直した知識』と比較すると実に穴だらけで、どちらが幼稚なのか判別がつかなくなってくるのだが。

間違った理屈でも押し通して実現できてしまう、あの世界の【魔法】が全て悪い。

いつかはあちらへ帰ることが出来るかも知れない。

そもそも異世界探索を是とするこの国の政府や、少なくとも自分を比較的穏やかに助けてくれた燦は『それこそ』が目的の節があるのだから。

だからといって選択がどうなるのかまでは判らないが、学ぶことそして『信頼』を繋ぐことは大事な選択になる筈だ。

だからこそ、シシリーは近い位置に収まって共に生活することになるのであろう燦と、なるべくなら親しい関係になろうかと距離を詰めていた。

若干つり橋効果が迸っている気もするが、元々この娘は『強い人』に無意識ですんなり擦り寄るタイプの『女子』である。

そして独占欲が強い。

だからこそ、

「アンタ強いよねー！ 良いわー！ この学園に通うことを認めてあげる！ 認めただからこれからは毎日このアクア様を女神と崇めること！ これは決定事項よ！」

なんか快活に粉を掛けに来る青髪の「妖怪キャラ被り」っぽい女子の存在は認められないくらいには、燦に他の女子が擦り寄ることを呑み込めない。

というかなんでいきなり女神を自称してらんだアレは離れるコラ。

実際にそんな内心であったとは云わないが、シシリーさんは若干の激おこでタオル片手にアリーナへと邁進していった。

クロスオーバーの その先

【煌咬緘凱・シヤングリオン】、それが熨斗柄 燦の手にある【魔神機】。

正しくは幾体もの魔神機が戦いの果てに統合を果たした、この世に2体のみ現存する【統合機】である。

銀座事件が起こるより僅かに先立って、ある中学生らが修学旅行中にひとクラスだけ行方不明となった。

彼らの行方が判明するよりも先に異世界との邂逅が成され、大きく被害を齎された日本にとっては33人の中学生が消えた『程度』の事件は早々に人々の戸口から立ち消えていったのである。

燦はそんな被害者の中から唯一こちらへ戻って来れた只一人の【帰還者】だ。

彼の証言によって彼らが連れ去られた先が似た様に『異世界』であると判明したことで、政府は彼らの事情と燦の身分と立場を隠蔽することに決めたのだ。

無論、そうすることで生じる様々な摩擦や誤解、例えば被害者遺族への配慮などという些末ながらも重大な問題に『正面から向き合う気が無い』という中々に下種で無礼な勘繰りも招くような選択を取ったのだと伺えよう。

しかし其処には倫理や人道に反しながらも、呑まねばならないほどの衝撃的な事情が絡んでいる為であると断言できるはずであった。

異世界へ拉致された中学生らが遭遇したのは、「アマテウスコード」なる唯一神へ至る為の試練の闘技場。

年端も行かぬミドルティーンに課せられた試練とは、『神の力』をも凌駕する巨大口ボ【魔神機】を駆りて、ひとつの次元を横断するほどの広大な闘技場で、殺し合いと蟲毒を強いられる喰い合いの連鎖によるバトルロワイヤルであった。

魔神機は1体1体が数多くの神の『嵩ね合わせ』の果てに形成された、絶大的な質量とエネルギーの具現だ。

それらが残り2体になるまで統合されたそれは、片方だけで恒星に匹敵するほどの存在性をその形へ押し留めているに過ぎない。

シャングリオンは事実、太陽と同等の質量とエネルギーを『機体』という枠に押し留めている状態である。

概念とかエネルギーの一端を引き出したとか、『よく耳にする』程度では収まらない『そのもの』こそがそれなのだ。

その機体を駆る以上、不可能なんて事象は無い。

何せ元来魔神機の操縦者、彼らは「同調者」と呼んでいるが、その同調者になった時点で魔神機が傍に居なくとも性能と性質を遠隔的に引き出すことが出来る。

そしてシャングリオンは全長200メートルの所謂『巨大ロボ』だ。

巨大ロボの操縦者にまで隙が無いことは、完全に自明の理であった。

尚東京タワーより低いとはいえ直立されれば目立つのは仕方がないので、現在は自衛隊の演習場をなんとか空けて横にして安置している。

初めは光学迷彩（機体能力などではなく『そう出来る』ことも可能な性能）で姿を消して山にでも体育座りで控えさせておこうか、との声が燦本から出たのだが、それだけの巨体で姿が見えないという方が国側が不安を抱くとの意見で現状である。

ちなみに調査に関してはゴリゴリ削って構いません、との許可まで下した燦であったが、本体の多少の傷程度なら放っておけば再生するからとの認識での許可であった。尤も、幾ら工具で削っても欠片もどうにも剥がれず劣化もする気配もないのが現実であったので、燦の配慮は些か無意味になってしまったのであったが。

もうひとつちなみに云うと、魔神機は同調者が呼べばすぐさまいつでも物理的に飛んで来る。

瞬間移動も斯くやという光並みの速度で巨大建造物が飛来するので、同調者だけは守られるが周囲への影響は計り知れない被害を齎す。

つまり呼び出せばIS学園が死ぬ。何気に何時でも押せる爆発物の起動スイッチを片手にしたよりも『酷い』危険人物が、無事入学を果たした瞬間であった。

最後の1体になるまで、つまり「アマデウスコード」へ至る事こそが彼らの闘争の理由であった。

だが燦は、その最終戦に臨む前に次元より弾き出された。

唯一残った『友人』と対峙することなく、最初で最後の裏切りを受けたのである。

だからこそ、彼はもう一度アマデウスコードを目指さなくてはならない。

現状でどのように強大で絶対的な存在と性能を誇って居ようとも、それは逃れられない宿命にも似た矜持なのだ。

だからこそ燦は遺るもう1体の統合機（キョクテんぜんしやう）「跣天残照・ポラリウス」とその機体の同調者たる『友人』に再び出会うために、異世界探索の柙を自ら手にしようとしていたのだから。

そんな彼は、目の前に現れた女神を名乗る少女に困惑していた。

ちなみに死闘の末に仲間になりつつも強大な敵相手には咬ませになるような斃され方をしそうであった車田墜ちで吹っ飛ばした少女もまた『少女』だ。

年上っぽい感はあるのだが、少年から見ようとも学園に通う年頃である以上は『少女』というカテゴリーで問題は無いのだ。

なので彼女の喩えは『少女』でも間違いはない。

問題なのは、彼女はそんな自信満々に決済を降せるような立場にいるのだろうかという懸念だ。

学園最強が云々、と車田墜ち少女がなんか言つてた気もするが、燦にとつての絶対的なライバルであり『敵』とは『友人』オンリーだ。

こんな狭い世界学園のサル山を気取る気は毛頭無く、どちらかと云えば伊丹耀司という『英雄』が勤務するから着いてきたというスタンスの方が強い。

別にホモではない（直球。

で、だ。

「……とりあえず、アンタなんの神？」

実のところ、神云々と云う部分には疑いの目は向けていなかった。

氾濫からこつち、人間に概念存在や英霊をぶち込んだ存在は珍しくも無い。

そもそもが『そういうの』を改めて集めたのが此処だから、かつての偉人や艦隊を名乗る少女が居ることくらいは燦も把握していたのだから。

しかし、彼女は名乗った『アクア』と。

そんな神は聴いたことも無い。

「水の女神アクア様よ！ さあ崇めるが良いわ！」

「直球過ぎるでしょ、宗教はもつと細分化して表してるのになんで大雑把に全部乗せを造るかな……」

本日のお前が云うな、であった。

『太陽そのもの』を扱えるヤツがなんか言うとする。

改めて云っておくが、燦に信心は無い。

そも本当に宗教的な神として何らかの守護者が居るのであれば自分たちが拉致られることがそもそも起こっていなかったであろうし、概念とかエネルギーの『格』を樹立させ『神』として擁立した33体の巨大ロボでバトルロワイヤルを遣る破目になったのだから。

これで神を崇められるとなったら最早狂信者を通り越してサイコである。

付け加えるならば、燦は神を『崇める方』ではなく『操る方』に値するのも加味されるが。

燦は生き残るために、それらが『どういったものなのか』を学習するだけの下準備は欠かしてこなかった。

そうした知識の大元は『友人』準拠なのだが、色々凝った趣味にも傾倒していた彼

からすれば魔神機の名前や特徴だけで『これこれこういう神でこんな逸話が』と諳んじることが容易かった。

尚其処は異世界であつたのだが何らかの近似性まで備えていたのかそれらの知識が無駄になることは余り無く、幾体もの魔神機を統合して往き装備や大きさが変化した中で其処に命名を嬉々として応用利かせたのも『友人』である。

『友人』がこの世界へ戻つて来ていれば、英霊や艦隊や航空機なんかの人類史に様々な小^{詳細}断を掻い摘んで貰えたのであろう。

燦の『友人』は異世界漂流に強すぎる。

残念無念ながら、燦にも実のところあまり興味も薄いカテゴリであるので、『そちら側』は邂逅でもしない限りは資料頼りであつたが。

話を戻すが、而してそんな『友人』の影響は少なくなき、此方の世界の「古今東西神様の名前」に多少は詳しくなつたのが今の燦だ。

シヤングリオンで斃し統合した機体の中にも水系の神を冠する神格があつたりもしたので、同じようなモノに遭遇する可能性も踏まえて改めて学び直した事項でもある。

そんな数多くの神格の中には、彼女が名乗つたような直球過ぎる名前を付けた神なんぞ聴いたことも無い。

まあ、そんなお蔭で『対峙』ではなく『呆れ』という精神性で迎えてしまえたのは未

だ幸福な方なのだろう。

女性権利団体が仕掛けたのかと僅かな疑いを抱きつつ完勝した試合直後に『自称神』に呐喊掛けられたのだから、下手をすれば問答無用で天高らかに巨大ロボを呼び出していても可笑しくない。

幾体もの神を降し下にこそ見ていても、決して侮っては居ないのが燦という少年である。

ちなみに斃した魔神機の名前は「水豪氷星・ネプチューヌス」だが余談過ぎるので割愛する。

「彼女はフランスの川の女神よ……」

よろり、と立ち上がりつつ語るのは先ほど撃墜した車田墜ち少女であった。

「もう一本逝つとく?」

「軽いノリで試合を誘わないで頂戴、エネルギーが足りないから今日はもう無理……」
ところでISのエネルギーとは何を使用しているのだろうか。

電気ならば交換性能が頗るオーバーテクノロジーな産物なのだが、原子力とか答えられるとまた別の団体からヘイトを集め兼ねない。

未知のエネルギーだとしても猶更だ。玩具に転換してないでもっと有効に活用しろとしか言いようがない。

「出来れば神としては紹介を求めたくないんだけどなあ……」

「……？ ああ、そっか、そういえば普通の認識だとそうなるのよね。でも、この学園じゃ『そう』呼ぶのが常識になっちゃってるから、其処は了承して貰えないと会話も面倒くさいわよ？」

数多くの神格や霊格や概念をそれぞれ混ぜたとはいえ、そういった存在ら是指折りともでは行かずとも限りの在る『歴史』だ。

なので『量産』も見込まれているし、実際に適用された者もあつたりする。

全員の容姿がそれで一律に収まるということは流石に無いが、神格によつては比較の難しい方向に似通うことがままあつたりも。

特に艦隊の少女らや、伝説の武器を身に収めた少女らは顕著だ。

彼女たちの様な『戦闘型』は日本各地の『危険地帯』に率先して配備されているので、連絡を取り合うと同じ顔をした少女らが互いに居る状況も偶に起こるらしい。

「まあいいや。で、このヒトにそこまで権限が？」

「な、い、わよ」

ないのかよ。

懸念が消えたのは良いが、ならばこの騒動は何なのかと燦は辟易とする。

「信者を集めないと神レベルの娘たちは実力を底上げできないし、最悪『揺り返し』で権

能まで喪失することもあるらしいわ。彼女は結構マイナーな女神を降ろしているから、潜在的には強いけどそれを發揮するための下地が足りてないのよね」

「信仰心不足かあ……」

可哀そうなモノを見る目で、青髪の少女を見つめ直す。

へうう、と自称『アクア様』は一步下がった。弱い。

そもそも、それが狙いならば信仰心の欠片も無い燦では完全に役不足だ。

誤用的な意味で。

「あと彼女クラスメイトなのよね。そこそこ私相手にも突つかかってくるから、私を降した貴方を自分の派閥に加えれば手っ取り早く底上げできると思ってたんじゃないかしら」

「どちらにしても浅はかすぎる」

女子のマウンツの取り合いに巻き込まれた男子の気分だ。

間違っではないかい。

「ふ、ふん！　そこまで言われたら引き下がれないわね！　貴方私を崇める信者になりなさい！　今なら宴会でちよつと盛り上がれる水芸も覚えられるし、この『飲める洗剤』も付いてくるわよ！　転校生がデビューするなら宴会は必須よね!？」

解説する車田墜ち少女に怯んでいた自称女神であったが、特別欲しくも無い特典で籠

絡に懸かって来た。

転校生、確かに間違っではないのだが、燦としてはやや仕事寄りの編入なので其処までの意識はない。

「其処まで勧誘するのなら、大雑把な『水の女神』を自称するんじゃないやなく正確な『神名』で誘ったらどうなの？」

なので直接断るのではなく、彼女たちが正しく成長できるような正論で糺すことにした。

一応は『折るな』との命だけは受けているので、不完全燃焼を避けるのが燦なりの『促進』である。

「せ、正式名称……?」

まさか知らないということもないだろう。

勢いの緩急が激しすぎる少女は、若干恥ずかしそうに身を引き始めていた。

「な、なんのことかしら? 私は水の女神よ? 人々の安寧と命を司る流れゆくように透き通った、」

「正確に水神ならビッグネームがゴロゴロしてるんだ、安直なAQUAで押し通せるほど神社会は甘くないぞ」

此れまでの彼女の勧誘は、傍から見ても偽名でコミュニケーションを執ろうという詐

欺師の所業だ。

はよ名乗れや、とせつつくのも無理の無い話である。

ちなみに両性具有どころか無性の「クタアトアクアアインゲン」が今のところ『神会』の最大信仰だ。

日本では無くアメリカでの実存最前線少女だが、同率系統の「クトウル」は成長途上らしいので。

「……名乗らないんならこっちに訊けば良い話じゃないか？」

ぐぬぬ、と何時まで経っても切り出そうとしない『アクア様』から、車田墜ち少女へと水を向けた。

ちよ、あつ、と止めようとする女神を尻目に、苦笑した彼女はあつさりとネタバラシを敢行するのであった。

「彼女は「ボイーン」、フランスの古い『川の女神』を降ろされた娘よ。潜在能力はあるのよねー」

洗剤^{潜在}だけに……？

益体も無い冗句も連想できたが、くだらなすぎるので口に出すのは憚られる。

それよりなにより、余程言いたくなかった『真名』を明かされた少女^{女神}が真つ赤になつて震えてしまっているの、宥める心算で燦は優しく声を掛けるのであった。

「あー……、まあ、でっかくなりそうじゃないか、気にするなよ」
「うわー……ん!!!」

逆効果だった。